



IMAGINATION

イマジネーション

橋本 昂祈

目次

蒲田の夜は、今日も……	1
真夜中のつけ麺エンペラー……	2
不良の森のコカ・コーラ……	3
悪魔のカクテルパーティー……	4
マリアの日本語と優斗の英語……	6
sazanami……	8
マリアの告白……	9
雨宮家のシークレット……	12
イマジネーション……	14
富裕層の住む街にて……	16
優斗とマリア……	18

蒲田の夜は、今日も……

秋空深い闇に隠れるように、優斗は真夜中の街を彷徨っていた。焼トンをホッピーで流し込むサラリーマンや土方のオジサンたちを横目にバーボンロードを歩く。サンライズ商店街の正面入り口には行き場を無くした若者たちがたむろしている。年は優斗よりも上だろうか。

パチンコ屋の看板はピンクと紫のネオンが激しく瞬き、正気を失った中年男性を誘惑する。その先に見えるのは、中国人の娼婦たち。相手が男性と見るや、なりふり構わず声をかける。

「オニィさん。マッサージ。3000エン」

チャイニーズドレスの谷間から溢れる桃を押し付けながら甘い声をかけているようだ。

優斗は少しうつむきながらも娼婦の前を難なく通り過ぎた。

タクシー乗り場にはたくさんの人びとがいて、泡の抜けたビールのように苦い顔して並んでいる。夢を見るのは勝手だ。だが、夢から覚めた後に後悔するくらいならば蒲田なんかに来なきゃいい。優斗は思った。雑居ビルのエレベーターは開き、奥からちどり足の男がひとり出てきた。そろそろ冬だつてのにヨレヨレの白いTシャツの上に貧乏くさいイエローのパーカーを羽織ってる。優斗の目には大学生風に見えていた。待機していた制服姿のボーイがすかさず話しかける。

「どうでした？ リナちゃん」

ボーイは小声でいう。

「めっちゃ最高っすよ！」

言って大学生風の男はニヤニヤした。タバコをとりだすと、ボーイが素早く火をつける。

「リナちゃんは何気に歌も上手いんすよ」

ボーイは自慢気にいう。

「そうなんすか？」

男は興味深々なようだ。

「うちの系列店のキャバクラにヘルプで行くこともあります。もしかしたら、ピンク卒業してキャバにあがるかもしれないんで。オニイさんラッキーっすよ！ キャバ嬢とプレイできる店なんて蒲田じゃうちくらいっすよ」

ボーイがいうと胸ポケットから名刺を取り出して男に渡した。

「ワンダーウォール蒲田。リナちゃんも所属してるキャバクラです。また何かあればよろしくお願いします」

大学生風の男がタクシー乗り場へ消えて行くのを確認して、ボーイは無線機で「5番客乙確約」と呟いた。

「アニキ。お腹すいた」

優斗はボーイの背後から声をかけた。

「うわっ！」

大袈裟なまでなりアクションをして

「なんだ。優斗か…」

すぐさま我にかえる。ボーイはそれが腹違いの弟であることに気づいた。

真夜中のつけ麺エンペラー

「優斗、美味しいか？」

アニキはウーロン茶を片手に言う。

「……」

優斗はアニキの質問には答えず、黙々とチャーハンをかっこむ。思えば、昼飯にソーメンを食べた以降は、ほとんど何も食べていない。優斗は夢中でチャーハンを喰らう。

「ほら。これも食えよ」

アニキは小さい丼にタンメンを取り分けてやった。優斗は礼も言わず、タンメンのスープをレンゲですくって飲んだ。

「優斗。今日も母ちゃん帰って来なかったのか？」

アニキの言葉に優斗は少しイラついた。帰って来ないのはアニキだって同じじゃないか。

「母ちゃんのことなんてアテにしてないよ。そんなことより、いつになったらオレもアニキの下で働かせてくれるんだ？」

「もうちょっとだけコンビニで働いてろよ。そのうち引き抜いてやるから」

優斗は嬉しくなって、タンメンをズルズルと食った。アニキはずっと微笑んで優斗を見ていた。優斗はせっかく進学した高校を不登校になり、そのまま学校を辞めた。バンドがやりたかったのだ。学校を辞めてからは、地元のコンビニで17時から22までアルバイトをしている。が、優斗は年の離れたアニキと同じように、ヤクザ崩れのような男になりたかったのだ。母親は不倫中でアニキはヤクザまがいの仕事をし、父親なんかはとっくの昔に蒸発した。そんなクソみたいな人生だって同情されるほど落ちぶれてやしない。オレみたいな不幸な生い立ちの人間なんて蒲田にゃ腐るほどいるし、ロックバンドのサイドギタリストにはお似合いだ。

飯を食べた後、アニキはすぐ仕事に戻った。スキンヘッドで体格の良いマネージャーの男に何度も頭を下げているアニキがみえた。それをみて優斗は少しだけ泣きそうになった。

家になんて帰りたくない。本当はこのまま始発を待って海にでも行きたい。誰もオレのことを知らない町へ行き、異邦人と出逢い、夕暮れまで海辺で戯れていた。

優斗のスマホがブルブルと震えた。

『オニツカヒデキ』

その昔、自由が丘を仕切っていた元チームリーダーである。コンビニの同期のナナミちゃんからの紹介でヒデキと優斗は知り合った。

「ヒデキさんがこんな時間になんの用事だ？」

この時、優斗はまだ人生のスイもあまいも知らぬ純粋なる少年だった。

不良の森のコカ・コーラ

優斗はHONDAのモンキー100カスタムのエンジンをかけた。こいつを買うまでに無茶なアルバイトも幾つか掛け持ちした。

ギョルギョルギョル

モンキーにまたがり環八を羽田方面へ道なりに走り抜けていく。産業道路を左折して、四つ目の信号を右折する。気がつけば金属と油の匂いがする。すでに工場地帯に入っているようだった。森ヶ崎海岸のドンつきにある中学校跡地の前についたら連絡しろ。それがヒデキの指示だった。昔、アニキの用事で穴守稲荷までは来たことがあるが、その先は優斗も土地勘がない。

ましてや夜明け前の工場地帯は、バイオハザードでもプレイしているかのような怖さがある。

その昔、優斗は興味本位で事故物件を調べていたことがある。森ヶ崎海岸近くのアパートや工場跡地も事故物件が多い。5チャンネルでは、幽霊の類も出ると噂されている。

富士の樹海にも引けを取らぬ恐怖と戦慄。優斗の足がすくむ。刹那、迷い猫がモンキーの行手を阻んだ。車体はよろけてタイヤがスリップした。静寂の町に自動販売機のファンの音が微かに聞こえていた。優斗は十字をきった。

自動販売機で細い缶のコーラを買ってタバコに火をつけた。

ガードレールに腰をかけ、空を仰いだ。ガスの匂い立ち込める町では、見たこともないほどの星が瞬いていた。優斗は想像をめぐらす。

『オニヅカヒデキ』

自由が丘の元チーマーのリーダー。優斗が密かに好意を寄せていたナナミすら、ヒデキにとってみれば、単なるセフレの一人。抱いた女は数え切れぬ。セックスとドラッグに明け暮れたホスト時代を経て、紆余曲折あったらしいが、いまや、立派な実業家か。

…勝てない。この男にだけは。何もかも。

「アハハっ。何やってんだ？ オレ」
優斗は見知らぬ町で笑い声をあげた。
今夜は、酒池肉林。
地獄の釜が開こうとしていた。

悪魔のカクテルパーティー

ハウス系ミュージックの流れるライブスタジオにて、ヒデキの主催するパーティーが開かれていた。

「ナナミ。こっちこいよ」

ヒデキは真っ赤なソファーにあぐらをかいている。上半身は裸で左胸にアゲハ蝶のタトゥーがみえた。軽くタオルケットをかけているが、パンツは履いているだろうか。

ナナミはすでにキャミソール一枚の露わな姿を晒していた。

「でも…こんな場所じゃ」

ナナミは軽く抵抗した。

「いいから。こいって」

ヒデキは泣き止まない子供をあやすような甘い声でいう。

ナナミを横に座らす。ヒデキはナナミのキャミソールの上から胸に手をやる。ゆっくりと焦らしながらさすっていく。乳首をつまんで

「ナナミは本当に可愛いな」

耳もとに囁く。

「んっ…」

ナナミはヒデキの声に感じてしまった。その隙をみてヒデキは潤んだナナミの唇にそっと唇で触れた。ヒデキは舌を出すとナナミは口を開けて受け入れた。ヒデキが唾液を垂らす。

「なあ。ナナミ。優斗に俺たちの愛を見せつけてやろう」

ヒデキが低い声でいう。

「ヒドイよ。ヒデちゃん…」

ナナミは恥ずかしくなり言ったが、ヒデキはさらにしなやかに強くナナミを抱き寄せた。パンツの上から優しくクリトリスを撫でる。

優斗は遠くからヒデキを睨むような目つきで見ている。

「おい、優斗。今日はマリアの相手してやってくれ。ナナミはダメだ。もうこんなに濡れてる」

ヒデキは近くにいたバリ人の女に金を渡した。バリ人の女マリアは

「アリガト。ヒデキ」

迪々しい日本語でヒデキに礼をいう。

マリアはおもむろに黒のドレスを脱ぐ。華奢な身体に似つかわしくない大きな胸を揺らしながら優斗のもとへ歩み寄る。

「カムヒア。ユート」

琥珀色した肌に相応しい甘くてスパイシーな薫りがしていた。

「……」

優斗は嫌悪感を抱いた。

「ボーヤ。ダイジョウブ」

マリアがそっと優斗を包みこむ。優斗は身体中の神経がビリビリと震えていた。

「はあん。オーマイガー」

優斗は意を決してマリアを強く抱き寄せた。

ヒデキはそれを遠目で確認するとDJのアキラに目でサインを送り発破をかけた。

「ナナミ。コーラでいいか？」

ヒデキはナナミに声をかけた。

「コロナがいいな！」

アゲアゲな感じでナナミはいう。

「はいはい」

ヒデキは立ち上がって冷蔵庫からコロナを取り出した。隣の部屋の様子をのぞく。

「おい。ヤス！ 楽しんでるか？」

引き戸を開けると、ヤスがバックから激しく突いている最中だった。

「なつきちゃん。最高だぜ！」

「コロナ置いとくな！」

ヒデキのパーティーは明け方まで続いてゆく。仲間を退屈にさせない心配りは元チームマーのトップに相応しい。優斗は大好きなナナミを抱けなくて不満に思うだろうが、それもヒデキなりの計算だった。

優斗はやさぐれてる割には純粹で可愛らしい一面がある。ヒデキにとって優斗は可愛い弟分みたいなものだ。誰にでも抱かれてしまう恐れがあるナナミに、純粹な優斗はもったいない。ヒデキはそう考えていた。ならばせめて、性欲だけでも発散させてやりたい。

男の性欲は毒そのものだ。放っておけば誰かれかまわず抱きたくなってしまふ。だからヒデキはわざとらしく商売女を優斗にあてがった。

「バンドマンで成功したいなら。それなりに覚悟しとけ」

ヒデキが優斗に言ったセリフだ。それがヒデキなりの優しさだった。まだギリギリ未成年の優斗にはヒデキの言葉の意味がわからなかった。

マリアの日本語と優斗の英語

パーティーはAM4時でお開きだった。
ヒデキはナナミとナツキを車で送るため仮眠をとり、ヒデキの親友ヤスはDJのアカラがバイクのケツに乗っけていった。とり残されたマリアは、仕方なく優斗が蒲田まで送る羽目になった。バイクを駐車場に入れて駅までマリアを見届けて帰る予定だった。しかし、マリアは優斗の1メートル後ろをずっとくっついてきた。

「どこまで付いてくるつもりだ？」

優斗は怪訝そうにいう。

「……」

マリアは日本語があまりうまくない。優斗は歩みを止めてマリアの方をみた。

「アイアム：ノーマネー」

優斗は思いつく限りの英語でいう。マリアは「Oh」といいジェスチャーを交えて

「マネーイズヒデキ。もらってまーす」

右手でエンのマークを出した。

「……。マジかよ。めんどくさっ」

優斗は呆れてつぶやいた。

「アイアムバックトゥホーム」

優斗の英語はマリアの日本語より辿々しい。しかしちゃんと伝わってる様子だった。

「ユート。イエ。かえります？」

マリアはなぜか目をうるませた。

「イエス。帰ります。サヨナラ」

そんなことにはおかまいなしに優斗は突き放す。

「ユート！ ダメ！」

マリアは小走りになって優斗の前に来た。

「ワタシ。オカネ。モラッテマス」

マリアは必死にいう。

「金貰ってるからって言われてもなあ〜」

優斗はさっき散々、マリアの身体を堪能した。確かに、優斗の少ない女性経験からすれば、マリアの身体

は極上品だった。しなやかなくびれから突き出すぷりっとしたお尻や推定Eカップはあるおっぱい。顔だって優斗の好みだ。日本語がカタコトなどところもかなり新鮮だったし、実際に、短い時間で何度もイカせて貰った。デートするよりも先に、やることをやってしまった関係性、しかも会話にならない言語の壁。ナナミに未練がある訳ではないが、デートに誘いたいのはやっぱりナナミの方だ。だが、優斗は仕方なくマリアを連れて家に帰ることにした。

蒲田西口のサンライズ商店街を抜けていく。土曜日の早朝とあって、ゴミが散乱しているだけでなく酔っ払いまでが寝ている。中国人娼婦たちは集まってなにやら騒いでいた。相変わらず酒くさい街だなあとつくづく思う。

優斗はマンシヨンの近くにあるローソンストア100でマリアにお茶とアイスを買ってあげた。

商店街の最後の十字路を左に曲がってすぐに優斗たちが住むマンシヨンはある。

「マリア。入れよ」

ドアを開けてマリアにいう。

「ユート。アリガト〜!」

部屋に入るなりマリアは優斗を求めた。

「バカ。俺だけの家じゃねーんだぞ」

マリアはそんなことおかまいなしに優斗に抱きついて離れない。チュッチュしている。

優斗はマリアのキス攻撃を受けながらリビングルームまでおいやられた。アニキと母親はしばらくは帰ってこない。

「マリア。マッサージしてくれ」

「オーケー。エッチなのね」

「フツのいい」

「オーケー。マカセテ」

優斗は自分だけの部屋にマリアを連れ込んだ。

sazanami

その年の冬、優斗はマリアのために思い切って連休を取った。南国が恋しいというマリアのため沖縄県に連れてきた。沖縄ではレンタカーを借りて色んな場所へ連れて行く予定だ。

優斗は18歳の誕生日が来る少し前に車の教習所に通っていた。費用はなぜか全てアニキが出してくれた。

「オマエは学がないんだから車の免許くらいとっておけ。いつか必ず役に立つ」

アニキはそう言っていたが、優斗はいつかではなく『マリアのために車の免許を取ろう』と決心していた。頑張った甲斐あって、沖縄ライフを充分に満喫できる身分になった。

「マリア。星が綺麗だね」

恩納村のリゾートビーチを歩きながら優斗がいう。

「本当にステキ。ユート、ありがとう」

マリアはこの数ヶ月で格段に日本語が上手くなった。マリアはきちんと大学を出た上で日本に来日している。優斗はマリアを遊び人だと決めつけていた自分を恥じた。

「なぜ。ユートは大学を目指しますか？」

マリアはふいにいう。

それは全てあなたのためだ、と優斗は言いかけて「もっとたくさん勉強してガンガン稼ぎたいから、かな？」と言った。

二人は同じ目的のため、同じ方向をみつめている。だからこの先はマリアと共に、同じ速度で歩んで行きたいと、優斗はそう願っていた。

「マリアはなぜ日本にきたの？」

優斗は当たり障りのない質問をしたはずだった。マリアの顔色が一気に青ざめた。

「殺し屋。本国で殺し屋に狙われている…」

「冗談もうまくなつたな！」

言って優斗は笑った。

だが、マリアは険しい顔をした。はじめて見るその表情にはどこか憂いを秘めていた。

「殺し屋って、ホントなのか？」

優斗はマリアの腕をつかむ。

「半分はホント」

マリアはため息をついた。

「ユート。今までありがとう。サヨナラ…」

言ってマリアは立ち上がった。

「サヨナラ…って。マリア。本気か？」

優斗には『サヨナラ』の意味が全くわからなかった。マリアを愛すれば愛するほど、優斗の人生は好転していく。けど、でも、それは全てマリアのためと思って頑張ってきたことじゃないか。ウソだと言ってくれ。

マリアはスタスタと部屋の中に入っていった。

優斗はイタズラにマリアを追いかけることはしなかった。

海辺では優しいさざなみが聴こえていた。満天の星空は笑っているかのように暖かかった。

マリアの告白

マリアを失った日

それから幾星霜の月日経っただろうか。

「なんだよ！ アニキ。ギターなんてもうやらねーよ。捨ててくれ」

「お前、本気で言ってるのか？ 目を覚ませよ！」

ふだん温厚なアニキが珍しく声を荒げた。

マリアを失った日からギターはおろか大学受験すらどーでも良くなっていた。僕の心を映し出すように生活は荒んだ。ギターをやめたことで、アニキだけでなくナナミにも嫌われてしまった。この発端は、突然、本国へ帰ってしまったマリアからの手紙だった。その手紙には次のように書かれていた。

親愛なるユートへ

お元気ですか？

その後、大学は無事に受かったでしょうか。

ひょっとしたらユートはすでに結婚しているかもしれませんね。(ユートはハンサムだから)
子供もいるかもしれませんね。

そんな大変かもしれない状況の中

突然、お手紙を出してしまいました。

どうか身勝手な私お許しください。

ユートからしたら

ある日突然消えた女のことなど、これっぽっちも興味ないと思います。

けれど、私にとってユートが最後の男性です。

心の底から愛していました。(いまもです)

ですので、身勝手な女の戯言と思って

未練がましい南国女のバカな告白を
最後までお読みいただけたら
この上ない幸せです。

(ここからは自分の言葉で話します)

愛するユート。

ユートは私のためにギターを手放すと言いました。私の将来を思って夢を諦めたことについて素直に嬉しかったです。それだけ私を愛してくれていたのだから。ありがとうございます。

けれども、

私はユートにウソをつきました。

私は本国の大学など出ていません。本当にただの遊び人でした。長いことウソをついてしまひすみませんでした。

そのウソのせいで、ユートが夢を諦めたのだとしたら…

私は神の審判により地獄へ突き落とされる運命でしょう。ユートにも迷惑がかかることは明らかでしたし、事実、私は本国に帰って地獄をみました。ご安心ください。神はちゃんといました。

ヒデキから頂いたお金を本国に送り続けて、愛するユートまで騙して、私は最低な女です。

その上、未練がましく手紙を書いている。

すでにユートは

私のことなど忘れていたかもしれません。

私の書く文章や言葉など

何一つ信じられなくて当然です。

それでも、最後に言わせてください。

私は貧しくて卑しい家の出身ですが、ユートに安定を求めていた訳ではありません。
夢を追いかけていたユートが大好きでした。

ユートの部屋にはじめて招かれた日

あなたは私のためにギターを弾き語ってくれましたね。私はすぐに恋に堕ちました。
あの瞬間、私は世界の誰よりも高貴で幸せな女でした。

私は…

ユートの声が好き。

ユートのギターが好き。

あなたを彩る全てが大好きでした。

ギターを諦めたユートには
魅力を感じません。

それが私の真実です。

いつの日か

ユートが大学を卒業したら

またギターを手にする時が来るかもしれませんね。

あなたは将来

大スターになって

私の国にも来て下さるかもしれない。

夢…

そんな簡単に諦められますか？

私のためにギターを置いたならば

今すぐ！ また夢を追いかけてください。

私はあなたのためならば
変な話し

この身が減ぶることも惜しくありません。

ユート

お願い！ 目を覚まして！

夢を叶えたあなたに逢いたい。

まだ結婚してないとしたら…

ユートには夢を諦めないで欲しいです。

ずっと遠くの国から応援しています。

マリアより

夢を追いかけてるあなたの側にいたかった。

雨宮家のシークレット

その夜、珍しくアニキが家にいた。優斗はリビングルームのソファで寝ているフリをしている。アニキは優斗に毛布をかけてあげた。

ふだん滅多に家に帰らないアニキのことだから、今すぐ話しかけなければどこかへ行ってしまうと優斗は思った。だが、アニキは優斗のそばを離れなかった。

「なあ。アニキ」

「たまらず優斗は話しかける。」

「なんだ？」

「アニキは少し疲れた声でいう。」

「オレ。この先どうしたらいい？」

「それは自分で考えろ」

「なんだよ。さっきはギター諦めんとか散々言ってたくせに…」

「優斗。所詮、カエルの子はカエルだよ」

「アニキは意味深にいう。」

「どーゆー意味だよ？」

「うちの親父な。アイツ最低な男だった」

「まあな」

「優斗の母ちゃんはまだマシな方さ。ひょっとしたら親父は優斗の母ちゃんだけを愛してたかもな」

「そーなん？」

「ああ。優斗の母ちゃんと違って、オレのお袋なんてヒドイ扱いを受けたさ」

「どんな？」

「気に入らないことがありやすぐにお袋を犯すし、飯だってテーブルごとひっくり返すしな」

「ホント最低なやつだったね」

「あんまり記憶ないだろ？」

「言ってアニキは笑った。」

「んで。カエルの子はカエルって話しな」

「そう。それ」

「うちの親父ってプロのギタリストだったんだよ」

「え。ウソだろ？」

「いやマジで。けっこう売れてたらしい」

「売れてたらこんな貧乏な暮らししてるかよ」

言って優斗は笑った。

「優斗。今だから言うけどな。うちの家系っていうほど貧乏じゃないぞ」

「はあ？　こんなスラム街の端っこのマンションあてがわれたくらいで魂売るのか？　もしうちが貧乏じゃなかったらアニキだってあんな仕事やってねえだろ？」

「まだまだ子供だな。俺は好きであの仕事やってんだよ」

「ウソだろ？」

優斗はこのセリフを何回言ったか正確に記憶していない。兩宮家が持つ家系の不思議さに触れて、それ以上言葉にならなかった。

「まあ。夢を追ってたのは優斗だけじゃねえよ。俺だって夢のために今の仕事してる。けど、俺の夢の話はまた今度にしよう。それで、お前にはまだまだ話してないことたくさんあるけど、悪く思うな。色々、忙しいからな」

「アニキ。今日これで最後の質問にするよ」

「ああ。そうしてくれ」

「アニキだったらマリアを追いかけてバりに飛ぶ？　それとも、距離をとって夢を優先する？」

優斗はアニキに答えを委ねた。

「最後に難しい質問きたな。オレだったら…。どうするかな。所詮、優斗とマリアちゃんの問題だから一概には言えないよな」

「だよな」

「でも、俺だったら夢を諦めずに夢を叶えることに専念するな」

「つまんねー！」

優等生的なアニキの発言に優斗はイラっときた。

「うるせーよ。これじゃまるで誘導尋問じゃねーか。マリアちゃんを追いかけたのなら好きにしろよ」

「そんな金あったら苦労しねえよ」

「まあな」

言ってアニキは時計をみた。

「もう2時じゃん。早く寝ろ。俺は仕事に戻るから」

「おやすみ」

言って優斗は毛布に顔を埋めた。

イマジネーション

その日、優斗は寝れずにギターを掻きむしっていた。極限まで疲れていたし横になればいつでも眠れる気がした。けど、目を閉じるとマリアの陰が猛スピードで襲ってくるからだ。

明け方になって頭がムシヤクシヤして優斗は自慰行為をした。射精した後に好きな気持ちが変わらなければ本物の恋愛。昔、頭の悪い友達が教えてくれたことだ。マリアのこと。本気で愛しちまった。優斗は悶々として呪文を唱えた。

ゆっくり瞳を閉じながら、優斗は想像力を働かせていく。マリアとの未来やギタリストとしての成功をイメージしていく。

マリア。マリア！

薄暗い照明の下で。

ヒデキはマリアに話しかける。

「マリア。優斗は最近頑張ってるぞ」

「ホントですか？」

「ギター練習の合間縫って大学の勉強してさ」

ヒデキは嬉しそうにいう。

キャンドルがゆらゆら揺れていた。

「ワタシもユートに逢いたいです」

「んじゃ。そろそろ優斗にホントのこと話してもいいのか？」

(この場所は見覚えがある。ヒデキの自由が丘の実家だ。ヒデキの家は本当は金持ちなのに、長いこと僕に嘘をついて…。)

「ユートがワタシを必要としてくれるなら…」

(マリア。いつからこんなに日本語が饒舌になった?)

「優斗はいつでもマリアのことを想ってるよ」

(当たり前だろ。じゃなきゃ、あんな大嫌いな勉強を10時間もやるかよ!?)

「ユート。会いたい…」

(マリア! オレはお前だけを…!)

「おい！ 優斗？」

ヒデキはペチペチと優斗の頬を叩く。
優斗は目を覚ます。

「……。ヒデキさん？」

気がつけば優斗はヒデキの部屋にいた。

富裕層の住む街にて

「ヒデキさん。マリアは？」

優斗はヒデキの両肩に手を置き揺らした。

「おい。ちょっと落ち着けよ！」

ヒデキは優斗をにらみ腕をはたいた。

「ちょっとこれでも飲んでけよ！」

ヒデキは冷たい缶コーヒーを差し出す。

優斗はあたりをキョロキョロとして見渡す。間違いない。夢の中でみたヒデキの実家だ。

「んで。マリアってバリの女だろ？」

言ってヒデキは首をバキバキと左右に振った。

「はい。森ヶ崎海岸で紹介してもらったマリアです」

優斗は必死にうったえる。

「付き合ってたならお前の方が詳しいだろ」

「マリア……。気づいたら本気で好きになっていました」

「ああ。お前好みかなあ〜って思って紹介したからな」

ヒデキの何気ない発言に優斗は衝撃を覚えた。

「マジっすか？」

「マジったらマジだよ。オマエああいう完璧無比なお嬢様タイプ好きだろ？」

ヒデキは軽くウインクしている。

「マリアがお嬢様？ 商売女って言ってませんでした？」

「商売女だあ？ そんな女紹介すると思うオマエのその発想の方が怖いよ」

「……」

優斗には何がなんだかよくわからない。

「ああ。マリアって自国じゃかなり有名な歌手だからな。それに、王家の末裔の娘らしいぜ」
優斗は頬をつねる。神経は通っている。これは現実だ。

「100歩譲ってマリアがお嬢様だったとして…。ヒデキさんどこで知り合ったんですか？」

「バカやろう。オニヅカ財閥をなめるなよ！ 伊達や酔狂で仕事してねえ。どんな有名人だろうが金さえだしや連れてきてやるよ」

ヒデキは虚勢を張る。

「へえ。知らなかった。さすが自由が丘の住人っすね！」

優斗は地元民との格差を感じた。

「んで…。話しみえねえんだけど。なんでオマエいきなりうちに押しかけてきてマリアーとか叫びながら倒れたんだ？」

「それは…」

優斗ははつきり思い出した。ヒデキのパーティーでヤスが相手していたナツキからもらった薬を飲んでから夢と現実の境目が解らなくなった気がしていた。

「まさか。クスリじゃねーだろうな？」

ヒデキは疑いの眼差しを向ける。

「いや。違うっす」

「誰か怪しいやついたか？」

「いや。いないっす」

優斗はナツキをかばっている。

「さすがにクスリやる奴は…。二度どうちのパーティーには呼べねえよ。それこそマリアの国に飛んでもらうしか」

「バリってそんなヤバいんすか？」

「地域によってだな。まあ、そんな言ったら世界中そうだよ。優斗の地元だってそうだろう？」

「言うほど治安は悪くないっす」

「それはオマエがまだ子供だから…。まあいいや。んで、マリアとはどーすんだ？」

「どーするも何も…。ある日を境に突然フラれた身ですから」

優斗はモジモジしてグズりだした。

「じれってえな！ じゃ最後にこれだけは教えておいてやるよ。マリアは最初から優斗を狙って日本に来てるからな」

「え！？」

優斗は人生で初めて武者震いを経験した。こんな俺に会うために。なぜだ。

「追いかけるならば。車で羽田送ってやる。どーする？」

「金がないです」

「バカか。金くらいこっちで用意してやる。雨宮先輩の弟だからな。オレが聞いているのは…」

「ヒデキさん。最後までカッコつけてください！」

優斗はバーンとドアを開けて飛び出して行った。

まったく。雨宮家はいつもうちにめんどくさい問題を持ってきやがる。ヒデキはベランダに出てタバコに火をつけた。

「あ！ ヤス？ 優斗が羽田向かってるから。後はよろしくな〜」

「ヒデキ…！ きいてねー」
ガチャ。ツーツ。

ヒデキは青空を眺めて少年のような笑みを浮かべた。

優斗とマリア

沖縄県のとある離島にて。

雨宮家とバリ王族のプリアタン家の結婚式が開かれた。

神父は聖書を右手に持ち静かに待つ。

荘厳なパイプオルガンの音色と共に、優斗はゆっくりと歩みを進める。この日が来ることを一番願っていたのは優斗のアニキではなく母ちゃんだった。母ちゃんは優斗の晴れ姿にうっすら雫を浮かべていた。アニキが隣で母ちゃんの背中をさする。

純白のサマードレスに身をつつむマリアは長いまつ毛のカールした瞳の奥に凜とした一筋の灯を輝かせていた。優斗との身長差は約10センチほど。優斗は泣きたい気持ちをグッとこらえていた。その様子が年上のマリアにはとても可愛いらしく映っていた。

「誓いますか？」

神父はいう。

「誓います」

優斗とマリアの声が高らかに教会に響いた。

誓いのキスをする際にマリアは優斗を見上げた。優斗の目は潤んでいる。マリアはうなずき（私が優斗を幸せにするから）小声で言った。

チャペルの鐘は鳴り響き

鳥たちは大空へ羽ばたいた。

ヒデキとヤスは式が終わると無言で海辺に立った。ヒデキの肩がかすかに震えていたのをヤスが気づき、そっと手を伸ばして肩を抱いた。

ナナミとなつみはブーケの奪い合い。マリアの友人たちは微笑んでその様子をみていた。

新婚初夜のこと。

神々の住む島と謳われる沖縄県の中でも最高の純度を誇る海辺に優斗とマリアはいた。

マリアは優斗の肩に頭を寄せて爽やかな風に吹かれていた。宝石箱をひっくり返したような水面の輝き。その光景を観た刹那、全ての記憶がモノクロームのように優斗の脳内を駆け巡る。

「最後までいカッコつけてさせてください！」

優斗はバーンとドアを開けて飛びだした。ヒデキは親友のヤスに電話していた。その日、ヤスは横浜にいた。ヒデキから「優斗が羽田に向かったからよろしく」と言われた。

(なんかよくわかんねーけど金を貸してやれってことか?)

ヤスは事情が掴めぬままタクシーで羽田へ向かった。

その頃、雨宮家では。

「ん？ 母ちゃんか。珍しいな」

「オニイちゃん。この手紙は？」

「ああ。優斗の小指だよ」

「優斗。外国へ行くのかい？」

「たぶん。今日あたり行くと思う」

「でもあの子。またパスポートでも忘れてないかい？」

「あ！ あんにゃろー！」

アニキは優斗の机の引き出しを片っ端から漁った。通帳の下に隠れていたのは優斗のパスポートだった。「母ちゃん。ちょっと出掛けてくる！」

優斗はイメージションを働かせてみんなのことをイメージしていく。

マリアはそれに気づき

「どうしたの？」とたずねる。

「オレ。ずっと一人だと思ってた。」

オレ。いつも見えない何かに怯えていた」

マリアはうなづく。優斗は話しを続ける。

「オレ。大切なことを見失っていた」

優斗がいうとマリアは微笑む。

純粹さを奪われた。とある日の痛み苦しみ。

傷つけあうだけが恋愛じゃない、と。

誰かが笑って励ましてくれた。

人は一人では生きられない、と。

正論を言われるたびに嫌気が差してた。

ありがとうの意味すら知らぬ。

暗闇に放り出された少年の恨み。

でも、あなたに出逢えて

僕は強くなれた。

優斗は我に返りマリアに謝る。

「ユート。そのまま。続けて…」

マリアはいう。

優斗は深呼吸して朗読を続けた。

「我がこころの友よ！

全てのアニキや姉貴たちよ！

可愛い弟や妹たちよ！

生まれてきてくれてありがとう！」

生まれてはじめて素直な気持ちを表現できたことに優斗は万感のこもる想いで呟いた。

「マリア。ありがとう」

マリアは優斗の声に泣き濡れた。

向日葵畑には無数の天使が宿ると云う。

優斗とマリアは永遠を誓った。

イメージーション

著 者 橋本 昂祈

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
